

モニタリングサイト1000



モニタリングサイト1000

シギ・チドリ類調査 ニュースレター

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2019年春期概要

2019年春期結果の概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2019年度春期の概要をお知らせします。



最大個体数は2000年以降最小値

2019年度春期調査は、2019年4月1日から2019年5月31日までの期間実施されました。123ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査（2019年4月21日を基準日とした前後1週間の調査）への参加は96ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類 42種18,599羽、ツクシガモ405羽、ヘラサギ4羽、クロツラヘラサギ142羽、ズグロカモメ34羽が記録され、春期の全サイトの最大個体数（調査期間内に記録された各種個体数の最大値）の合計では、シギ・チドリ類 52種62,792羽、ツクシガモ745羽、ヘラサギ21羽、クロツラヘラサギ274羽、ズグロカモメ481羽が記録されました。

2000年春期以降の「全サイト」と「調査が継続されているサイトのみ」の最大個体数の合計を、ヒレアシシ

ギ類を除いてグラフに示しました（Fig1）。全サイトの最大個体数の合計は、前年度春期と比べ5,135羽（-7.6%）減少し62,684羽、継続サイトでは前年度春期と比べ352羽（+0.9%）増加して39,238羽となり、全サイトでは前年に引き続き減少し過去最少となり、継続サイトでは、ほぼ横ばいという結果でしたが、2000年から見ると15,000羽ほど減少しています。



Photo1. 大授搦
by Toshifumi Moriya

増加数が大きい継続サイトでは大授搦（Photo1）が突出して多く、減少数が大きい継続サイトは白河河口、高瀬川河口、濤沸湖などでした（Table1）。地域で見ても、一斉調査、最大個体数ともに、北海道東北部、関東太平洋岸、山陰、瀬戸内海西部と周防灘、九州南部で前年より減少、東北日本海岸、大阪湾周辺と紀伊水道、四国太平洋岸、沖縄本島で前年より増加しており、南北による地域の違いもありませんでした。最大個体数では北海道の3地域（北海道島北部、東部、西部）で減少していました。

Table 1. 春期調査における継続サイト別の減少数と変化率
A: 減少数上位5サイト、B: 増加数上位5サイト

	減少数		変化率	
	2018年	2019年	Change No.	Change rate
熊本県 白川河口	2,138	647	-1,491	-69.7%
青森県 高瀬川河口	1,491	52	-1,439	-96.5%
北海道 濤沸湖	1,528	301	-1,227	-80.3%
千葉県 三番瀬	3,190	2,712	-478	-15.0%
三重県 雲出川河口五主海岸	772	369	-403	-52.2%

	増加数		変化率	
	2018年	2019年	Change No.	Change rate
佐賀県 大授搦	12,913	17,366	4,453	34.5%
佐賀県 鹿島新籠海岸	1,522	2,069	547	35.9%
徳島県 吉野川下流域	977	1,396	419	42.9%
三重県 安濃川河口～志登茂川河口	498	767	269	54.0%
三重県 愛宕川～櫛田川河口	151	371	220	145.7%

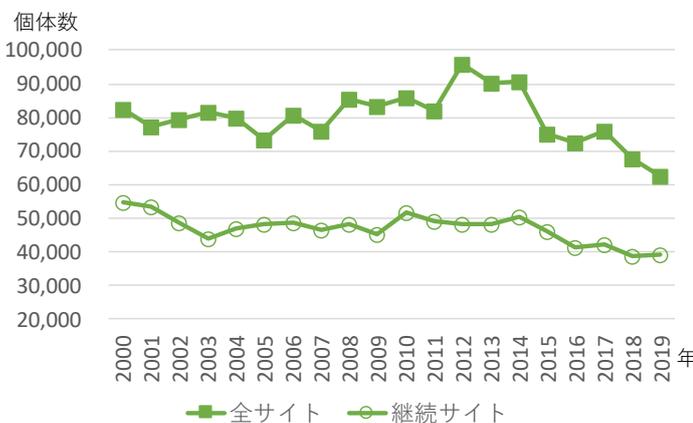


Fig1. 春期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移（1999年から2019年の継続サイトN=42）年次変動の大きいヒレアシシギ類は除外

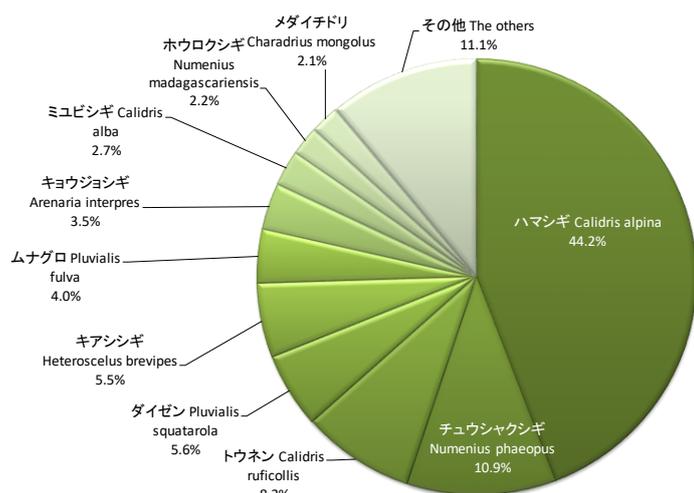


Fig2. 2019年春期調査におけるシギ・チドリ類の種構成

最大個体数における優占種の上位種は、ハマシギ(44.2%)、チュウシャクシギ(10.9%)、トウネン(8.3%)で、前年度順位から、チュウシャクシギとトウネンが入り替わりました。4位以降はダイゼン、キアシシギ、ムナグロの順となり、前年4位だったキョウジョシギが順位を下げ7位となっています(Fig2)。

シギ・チドリ類の種別の個体数では、トウネン(-2,356羽)、ハマシギ(-1,896羽)、キョウジョシギ(-1,375羽)の減少数が大きく(Table 2)、全体では、増加した種が24種、減少した種が26種でした。また前年に減少していたホウロクシギは、前年の約6.5倍の個体数が観察されています。減少率では、

Table2. 春期調査における最大個体数上位5種の減少数と変化率
A: 減少数上位5種、B: 増加数上位5種

		減少数		変化率	
		2018年	2019年	Change No.	Change rate
A					
トウネン	<i>Calidris ruficollis</i>	7,589	5,233	-2,356	-31.0%
ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>	29,642	27,746	-1,896	-6.4%
キョウジョシギ	<i>Arenaria interpres</i>	3,542	2,167	-1,375	-38.8%
アカエリヒレアシギ	<i>Phalaropus lobatus</i>	1,386	103	-1,283	-92.6%
ミユビシギ	<i>Calidris alba</i>	2,260	1,670	-590	-26.1%
B					
		増加数		変化率	
		2018年	2019年	Change No.	Change rate
ホウロクシギ	<i>Numenius madagascariensis</i>	181	1,369	1,188	656.4%
ダイゼン	<i>Pluvialis squatarola</i>	3,014	3,500	486	16.1%
ムナグロ	<i>Pluvialis fulva</i>	2,282	2,520	238	10.4%
シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	528	707	179	33.9%
チュウシャクシギ	<i>Numenius phaeopus</i>	6,727	6,872	145	2.2%

100個体以上観察された種に限ると、アカエリヒレアシギ(-92.6%)、ウズラシギ(-43.2%)、キョウジョシギ(-38.8%)、オバシギ(-37.4%)、トウネン(-31.0%)、セイタカシギ(-30.1%)、メダイチドリ(-28.6%)、ソリハシシギ(-28.5%)、ミユビシギ(-26.1%)などの減少率が高い水準にありました。



トウネンの個体数の推移

最近トウネン(Photo2)は、年々優占種の順位を下げ、個体数も減少しています。2000



年台前半は春期と秋期が同じような推移をしていましたが、秋期が2007年頃から増減を繰り返し徐々に減少傾向になり、春期は2012年頃から急激に減少しています(Fig3)。春期は過去最少個体数をまだ下回っていませんが、現状の減少傾向から考えると注意すべき状況と考えられます。地域では、関東周辺の湿地、谷津干潟や多摩川河口などの東京湾周辺、大阪南港野鳥園などの大阪湾、博多湾周辺などの地域で減少しているサイトがあります。また、九十九里浜や伊勢湾などの砂浜のサイトでは増加傾向にあります。

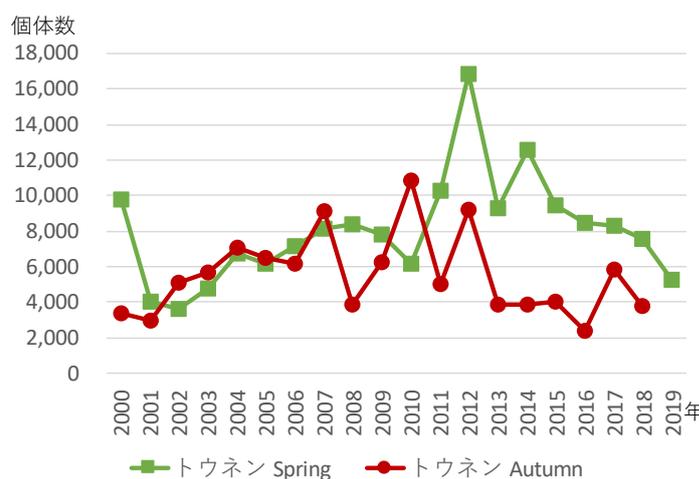


Fig3. 2000年から2019年までのトウネンの最大個体数の動向

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:キアシシギ(守屋年史) 2019年 春期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

<http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史

電話/Fax: 042-401-8661

メール: shigichi@bird-research.jp